Z316r　近世日本の日記史料にみる天文認識- 天文現象の記録化の意義と科学研究への活用に向けて-

岩橋清美（国文学研究資料館）

日本近世社会においては、いわゆる「天文家」と称される人々のほかにも多くの人々が天文現象を書き残している。こうした多様な社会階層が天文現象を記述した史料に日記がある。そもそも日記は、近世文書主義社会の影響をうけて、職務上の必要性や家意識の上昇と相俟って記されるようになった。つまり、自己と自家の子孫のために書き残されるものなのである。日記には、彗星やオーロラといった天文現象が珍しい天変として記されることが多い。しかし、その記述内容は同じ天変でもあっても記録者により様々である。ここでは、大名・公家・寺社・庶民が書き残した日記の記述を紹介し、当時の人々の天文認識を、その背景にある知識・学問および社会集団との関わりから分析する。さらに史料から読みとれる当事者の視点と、それを用いて科学研究を行う科学者の視点をどのように止揚していくべきなのかを考えてみたい。